

雪の女王

SNEDRONNINGEN

七つのお話でできているおとぎ物語

青空文庫

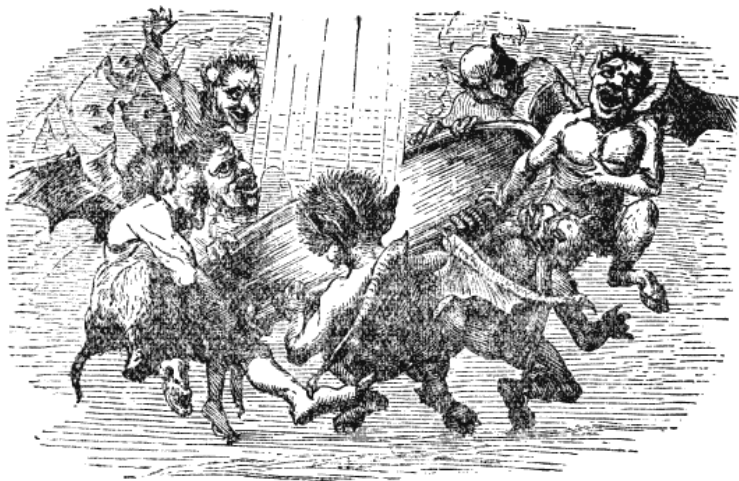
第一のお話

鏡とそのかけらのこと

さあ、きいていらつしやい。はじめますよ。このお話をおしま
いまできくと、だんだんなにかがはつきりしてきて、つまり、そ
れがわるい魔法使まほうつかいのお話であつたことがわかるのです。この魔
法使というのは、なかまでもいちばんいけないやつで、それこそ
まがいなしの「悪魔あくま」でした。

さて、ある日のこと、この悪魔は、たいそうなごきげんでした。

というわけは、それは、鏡をいちめん作りあげたからでしたが、その鏡というのが、どんななけっこうなうつくしいものでも、それにうつると、ほとんどないもどうぜんに、ちぢこまってしまいうかわり、くだらない、みつともないようすのものにかぎって、よけいはつきりと、いかにもにくしくうつるといふ、ふしぎなせいしつをもったものでした。どんなうつくしいけしきも、この鏡にうつすと、煮^にくたらしたほうれんそうのように見え、どんなにりっぱなひとたちも、いやなかつこうになるか、どうたいのない、あたまだけで、さかだちするかしました。顔は見ちがえるほどゆがんでしまい、たった、ひとつぼちのそばかすでも、鼻や口いっばいに大きくひろがって、うつりました。



「こりやおもしろいな。」と、その悪魔はいいました。ここに、たれかが、やさしい、つつましい心をおこしますと、それが鏡には、しかめつつらにうつるので、この魔法使の悪魔は、じぶんながら、こいつはうまい発明はつめいだわいと、ついわらいださずには、いられませんでした。

この悪魔は、魔法学校をひらいていましたが、そこにかよっている魔生徒どもは、こんどふしぎなものがあらわれたと、ほうぼうふれまわりました。

さて、この鏡ができたので、はじめて世界や人間のほんとうのすがたがわかるのだと、このれんじゆうはふいちようしてあるきました。で、ほうぼうへその鏡をもちまわったのですから、と

うとうおしまいには、どこの国でも、どの人でも、その鏡にめいめいの、ゆがんだすがたをみないものは、なくなつてしまひました。こうなると、凶にのつた悪魔のしもは、天までも昇^{のぼ}つていつて、天使^{てんし}たちや神さままで、わらいぐさにしようとおもひました。ところで、高く高くのぼつて行けば、行くほど、その鏡はよけいひどく、しかめつつらをするので、さすがの悪魔も、おかしくて、もつていらなくなりました。でもかまわず、高く高くとのぼつていつて、もう神さまや天使のお住居^{すまい}に近くなりました。すると、鏡はあいかかわらず、しかめつつらしながら、はげしくぶるぶるふるえだしたものですから、ついに悪魔どもの手から、地の上へおちて、何千万、何億万、というのではたりない、たいへ

んな数に、こまかくくだけで、とんでしまいました。ところが、これがため、よけい下界げかいのわざわいになったというわけは、鏡のかけらは、せいぜい砂つぶくらいの大ささしかないので、世界じゆうにとびちってしまったからで、これが人の目にはいると、そのままそこにごびりついてしまいました。すると、その人たちは、なんでも物をまちがってみたり、ものごとのわるいほうだけをみるようになりました。それは、そのかけらが、どんなちいさなもので、鏡がもっていたふしぎな力を、そのまま、まだのこしてもっていたからです。なかにはまた、人のしんぞうにはいったものがあつて、そのしんぞうを、氷のかけらのように、つめたいものにしてしまいました。そのうちいくまいか大きなかけらもあつ

て、窓ガラスに使われるほどでしたが、そんな窓ガラスのうちから、お友だちをのぞいてみようとしても、まるでだめでした。ほかのかけらで、めがねに用いられたものもありましたが、このめがねをかけて、物を正しく、まちがいのないように見ようとすると、とんださわぎがおこりました。悪魔はこんなことを、たいへんおもしろがって、おなかをゆすぶって、くすぐったがって、わらいました。ところで、ほかにもまだ、こまかいかけらは、空のなかにただよっていました。さあ、これからがお話なのですよ。

第二のお話

男の子と女の子

たくさんの家がたてこんで、おおぜい人がすんでいる大きな町では、たれでも、庭にするだけの、あき地をもつわけにはいきませんでした。ですから、たいてい、うえき植木ばちの花をみて、まんぞくしなければなりませんでした。

そういう町に、ふたりのまずしいこどもがすんでいて、植木ばかりよりもいくらか大きな花ぞのをもっていました。そのふたりの



こどもは、にいさんでも妹でもありませんでしたが、まるでほんとうのきょうだいのように、仲よくしていました。そのこどもたちの両親は、おむこうどうしで、その住んでいる屋根うらべやは、二軒の家の屋根と屋根とがくつついた所に、むかいあつていました。そのしきりの所には、一本の雨どいがおつていて、両方から、ひとつずつ、ちいさな窓が、のぞいていました。で、といをひとまたぎしさえすれば、こちらの窓からむこうの窓へいけました。

こどもの親たちは、それぞれ木の箱を窓の外にだして、台所でつかうお野菜をうえておきました。そのほかにちよつとしたばらをひと株うえておいたのが、みごとにそだつて、いきおいよくの

びていました。ところで親たちのおもいつきで、その箱を、とい
をまたいで、横にならべておいたので、箱は窓と窓とのあいだで、
むこうからこちらへと、つづいて、そっくり、生きのいい花のか
べを、ふたつならべたように見えました。えんどう豆のつるは、
箱から下のほうにたれさがり、ばらの木は、いきおいよく長い枝
をのばして、それがまた、両方の窓にからみついて、おたがいに
おじぎをしあっていました。まあ花と青葉でこしらえた、アーチ
のようなものでした。その箱は、高い所にありましたし、こども
たちは、その上にはいあがってはいけないうをっていました。
そこで、窓から屋根へ出て、ばらの花の下にある、ちいさなこし
かけに、こしをかけるおゆるしをいただいで、そこでおもしろそ

うに、あそびました。

冬になると、そういうあそびもだめになりました。窓はどうかすると、まるつきりこおりついてしまいました。そんなとき、子どもたちは、だんろの上で銅貨どうかをあたたためて、こおった窓ガラスに、この銅貨をおしつけました。すると、そこにまるい、まんま
るい、きれいなぞきあなができあがって、このあなのむこうに、
両方の窓からひとつずつ、それはそれはうれしそうな、やさしい
目がぴかぴか光ります、それがあの男の子と、女の子でした。男
の子はカイ、女の子はゲルダといいました。夏のあいだは、ただ
ひとまたぎで、いつたりきたりしたものが、冬になると、ふたり
のこどもは、いくつも、いくつも、はしごだんを、おりたりあが

つたりしなければ、なりませんでした。外そとには、雪がくるくる舞まつていました。

「あれはね、白いみつばちがあつまつて、とんでいるのだよ。」
と、おばあさんがいいました。

「あのなかにも、女王ばちがいるの。」と、男の子はたずねました。この子は、ほんとうのみつばちに、そういうものいることを、しっていたのです。

「ああ、いるともさ。」と、おばあさんはいいました。「その女王ばちは、いつもたくさんなかまのあつまつているところに、とんでいるのだよ。なかまのなかでも、いちばんからだが大きくて、けっして下にじつとしてはいない。すぐと黒い雲のなかへとんで

はいつてしまう。ま夜中に、いく晩も、いく晩も、女王は町の通から通へとびまわつて、窓のところをのぞくのさ。するとふしぎとそこでこおつてしまつて、窓は花をふきつけたように、見えるのだよ。」

「ああ、それ、みたことがありますよ。」と、こどもたちは、口をそろえて叫さけびました。そして、すると、これはほんとうの話なのだ、とおもいました。

「雪の女王さまは、うちのなかへもはいつてこられるかしら。」と、女の子がたずねました。

「くるといいな。そうすれば、ぼく、それをあたたかいストーブの上のにせてやるよ。すると女王はとろけてしまうだろう。」と、

男の子がいました。

でも、おばあさんは、男の子のかみの毛をなでながら、ほかのお話をしてくれました。

その夕方、カイはうちにいて、着物きものを半分はんぶんぬぎかけながら、ふとおもいついて、窓のそばの、いすの上にあがって、れいのちいさなのぞきあなから、外をながめました。おもてには、ちらちら、こな雪が舞まっていました。そのなかで大きなかたまりがひとひら、植木箱のはしにおちました。するとみるみるそれは大きくなつて、とうとうそれが、まがないの、わかい、ひとりの女の子になりました。もう何百万という数の、星のように光るこな雪で織おった、うすい白い紗しやの着物きものを着ていました。やさしい女の

姿はしていましたが、氷のからだをしていました。きらきらひかる氷のからだをして、そのくせ生きているのです。その目は、あかるい星をふたつならべたようでしたが、おちつきも休みもない目でした。女は、カイのいる窓のほうに、うなずきながら、手まねぎしました。カイはびっくりして、いすからとびおりてしまいました。すぐそのあとで、大きな鳥が、窓の外をとんだような、けはいがしました。

そのあくる日は、からりとした、霜日しもびよりでした。——それからは、日にまし、雪どけのようきになって、とうとう春が、やつてきました。お日さまはあたたかに、照てりかがやいて、緑みどりがもえだし、つばめは巣をつくりはじめました。あのむかいあわせの屋

根うらべやの窓も、また、あけひろげられて、カイとゲルダとは、アパートのてっぺんの屋根上の雨あまどいの、ちいさな花ぞので、ことしもあそびました。

この夏は、じつにみごとに、ばらの花がさきました。女の子のゲルダは、ばらのことのうたわれている、さんび歌をしつていました。そして、ばらの花というと、ゲルダはすぐ、じぶんの花ぞののばらのことをかんがえました。ゲルダは、そのさんび歌を、カイにうたってきかせますと、カイもいっしょにうたいました。

「ばらのはな さきてはちりぬ

おさなごエス やがてあおがん」

ふたりのこどもは、手をとりあつて、ばらの花にほおずりして、神さまの、みひかりのかがやく、お日さまをながめて、おさなごエスが、そこに、おいでになるかのように、うたいかけました。なんとという、楽しい夏の日だったでしょう。いきいきと、いつまでもさくことをやめないようにみえる、ばらの花のにおいと、葉のみどりにつつまれた、この屋根の上は、なんていいところでしたらう。

カイとゲルダは、ならんで掛けて、けものや鳥のかいてある、絵本をみていました。ちょうどそのとき——お寺の、大きな塔とうの上で、とけいが、五つうちでしたが——カイは、ふと、

「あッ、なにかちくりとむねにさきつたよ。それから、目にもなにかとびこんだようだ。」と、いいました。

あわてて、カイのくびを、ゲルダがかかえると、男の子は目をぱちぱちやりました。でも、目のなかにはなにもみえませんでした。

「じゃあ、とれてしまったのだらう。」と、カイはいいましたが、それは、とれたものではありませんでした。カイの目にはいったのは、れいの鏡から、とびちったかけらでした。そら、おぼえてい
るでしょう。あのいやな、魔法まほうの鏡のかけらで、その鏡にうつすと、大きくていいものも、ちいさく、いやなものに、みえるかわり、いけないわるいものほど、いつそうきわだってわるく見え、

なんによらず、物事ものごとのあらが、すぐめだつて見えるのです。かわいそうに、カイは、しんぞうに、かけらがひとつはいつてしまいましたから、まもなく、それは氷のかたまりのように、なるでしょう。それなり、もういたみはしませんけれども、たしかに、しんぞうの中うちののこりました。

「なんだつてべそをかくんだ。」と、カイはいました。「そんなみつともない顔をして、ぼくは、もうどうもなつてやしないんだよ。」

「チエツ、なんだい。」こんなふうふうに、カイはふいに、いいだしました。「あのぼらは虫むしがくつているよ。このぼらも、ずいぶんへんてこなばらだ。みんなきたならしいばらだな。植うわつている

箱も箱なら、花も花だ。」

こういつて、カイは、足で植木の箱をけとばして、ばらの花をひきちぎってしまいました。

「カイちゃん、あんた、なにをするの。」と、ゲルダはさげびました。

カイは、ゲルダのおどろいた顔を見ると、またほかのばらの花を、もぎりだしました。それから、じぶんのうちの窓の中にとびこんで、やさしいゲルダとも、はなれてしまいました。

ゲルダがそのあとで、絵本えほんをもってあそびにきたとき、カイは、そんなもの、かあさんにだっこされている、あかんぼのみるものだ、といいました。また、おばあさまがお話をして、カイはの

べつに「だって、だって。」とばかりいつていました。それどころか、すきを見て、おばあさまのうしろにまわって、目がねをかけて、おばあさまの口まねまで、してみせました。しかも、なかじょうずにやったので、みんなはおかしがってわらいました。まもなくカイは、町じゅうの人たちの、身ぶりや口まねでも、できるようになりました。なんでも、ひとくせかわったことや、みつともないことなら、カイはまねすることをおぼえました。

「あの子はきつと、いいあたまなのにちがいない。」と、みんないいましたが、それは、カイの目のなかにはいった鏡のかけらや、しんぞうの奥ふかくささった、鏡のかけらのさせることでした。そんなわけで、カイはまごころをささげて、じぶんをしたってく

れるゲルダまでも、いじめだしました。

カイのあそびも、すっかりかわって、ひどくこましゃくれたものになりました。——ある冬の日、こな雪がさかんに舞いくるっているなかで、カイは大きな虫目がねをもつて、そとにでました。そして青いうわぎのすそをひろげて、そのうえにふってくる雪をうけました。

「さあ、この目がねのところからのぞいてごらん、ゲルダちゃん。」と、カイはいいました。なるほど、雪のひとひらが、ずっと大きく見えて、みごとにひらいた花か、六角の星のようで、それはまったくうつくしいものでありました。

「ほら、ずいぶんたくみにできているだろう。ほんとうの花なん

か見るよりも、ずっとおもしろいよ。かけたところなんか、ひとつだつてないものね。きちんと形をくずさずにいるのだよ。ただとけさえしなければね。」と、カイはいいました。

そののちまもなく、カイはあつい手ぶくろをはめて、そりをか
ついで、やつてきました。そしてゲルダにむかつて、

「ぼく、ほかのこどもたちのあそんでいる、ひろばのほうへいつてもいいと、いわれたのだよ。」と、ささやくと、そのままいつてしまいました。

その大きなひろばでは、こどもたちのなかでも、あつかましいのが、そりを、おひやくしようたちの馬車の、うしろにいわえつけて、じょうずに馬車といっしょにすべっていました。これは、

なかなかおもしろいことでした。こんなことで、こどもたちたれも、むちゆうになつてあそんでいると、そこへ、いちだい、大きなそりがやってきました。それは、まっ白にぬつてあつて、なかにたれだか、そまつな白い毛皮けがわにくるまつて、白いそまつなぼうしをかぶつた人がのつていました。そのそりは二回ばかり、ひろばをぐるぐるまわりました。そこでカイは、さつそくそれに、じぶんのちいさなそりを、しばりつけて、いっしよにすべつていききました。その大そりは、だんだんはやくすべつて、やがて、つぎの大通を、まっすぐに、はしつていきました。そりをはしらせていた人は、くるりとふりかえつて、まるでよくカイをしつているように、なれなれしいようすで、うなずきましたので、カイはつ

いそりをとくのをやめてしまいました。こんなぐあいにして、とうとうそりは町の門のそとに、でてしまいました。そのとき、雪が、ひどくふってきたので、カイはじぶんの手のさきもみることができませんでした。それでもかまわず、そりははしつていきました。カイはあせつて、しきりとつなをうごかして、その大そりからはなれようとしましたが、小そりはしつかりと大そりにしぱりつけられていて、どうにもなりませんでした。ただもう、大そりにひっぱられて、風のようにとんでいきました。カイは大声をあげて、すくいをもとめました。たれの耳にも、きこえません。雪はぶつつけるようにふりしきりました。そりは前へ前へと、とんでいきました。ときどき、そりがとびあがるのは、生いけ

がきや、おほりの上を、とびこすのでしょうか、カイはまったくふるえあがつてしまいました。主のおいのりをしようと思っても、あたまにうかんでくるのは、かけぎんの九九ばかりでした。

こな雪のかたまりは、だんだん大きくなって、しまいには、大きな白いにわとりのようになりました。ふとその雪のにわとりが、両がわにとびたちました。とたんに、大そりはとまりました。そりをはしらせていた人が、たちあがつたのを見ると、毛皮のがいたうもぼうしも、すっかり雪でできていました。それはすらりと、背の高い、目のくらむようにまっ白な女の人でした。それが雪の女王だったのです。

「ずいぶんよくはしったわね。」と、雪の女王はいいました。

「あら、あんだ、ふるえているのね。わたしのくまの毛皮におは
いり。」

こういいながら女王は、カイをじぶんのそりにいれて、かたわ
らにすわらせ、カイのからだに、その毛皮をかけてやりました。
するとカイは、まるで雪のふきつもったなかに、うずめられたよ
うに感じました。

「まださむいの。」と、女王はたずねました。それからカイのひ
たいに、ほおをつけました。まあ、それは、氷よりもとつめ
たい感じでした。そして、もう半分氷のかたまりになりかけてい
た、カイのしんぞうに、じいんとしみわたりました。カイはこの
まま死んでしまうのではないかと、おもいました。——けれど、

それもほんのわずかのあいだで、やがてカイは、すっかり、きもちがよくなつて、もう身のまわりのさむさなど、いつこう気にならなくなりました。

「ぼくのそりは——ぼくのそりを、わすれちゃいけない。」

カイがまず第一におもいだしたのは、じぶんのそりのことでありました。そのそりは、白いにわとりのうちのいわに、しっかりとむすびつけられました。このにわとりは、そりをせなかにのせて、カイのうしろでとんでいました。雪の女王は、またもういちど、カイにほおずりました。それで、カイは、もう、かわいらしいゲルダのことも、おばあさまのことも、うちのことも、なにもかも、すっかりわすれてしまいました。

「さあ、もうほおずりはやめましようね。」と、雪の女王はいいました。「このうえすると、お前を死なせてしまうかもしれないからね。」

カイは女王をみあげました。まあそのうつくしいことといったら。カイは、これだけかしこそうなりっぱな顔がほかにあろうとは、どうしたつておもえませんでした。いつか窓のところనికిて、手まねきしてみせたときとちがつて、もうこの女王が、氷でできているとは、おもえなくなりました。カイの目には、女王は、申しぶんなくかんぜんで、おそろしいなどは、感じなくなりしました。それでうちとけて、じぶんは分ぶん数すうまでも、あんぎんで、できることや、じぶんの国が、いく平方マイルあつて、どのくらい

の人口があるか、知っていることまで、話しました。女王は、しじゅう、にこにこして、それをきいていました。それが、なんだ、知っていることは、それっぱかしかと、いわれたようにおもって、あらためて、ひろいひろい大空をあおぎました。すると、女王はカイをつれて、たかくとびました。高い黒雲の上までも、とんで行きました。あらしはざあざあ、ひゅうひゅう、ふきすさんで、昔の歌でもうたっているようでした。女王とカイは、森や、湖や、海や、陸の上を、とんで行きました。下のほうでは、つめたい風がごうごううなあって、おおかみのむれがほえたり、雪がしやつしやつときしつたりして、その上に、まっくろなからすがカアカアないてとんでいました。しかし、はるか上のほうには、お月さま

が、大きくこうこうと、照っていました。このお月さまを、なが
いながい冬の夜じゆう、カイはながめてあかしました。ひるにな
ると、カイは女王の足もとでねむりました。

第三のお話

魔法の使える女の花ぞの

ところで、カイが、あれなりかえってこなかったとき、あの女の子のゲルダは、どうしたでしょう。カイはまあどうしたのか、たれもしりませんでした。なんの手がかりもえられませんでした。こどもたちの話でわかったのは、カイがよその大きなそりに、じぶんのそりをむすびつけて、町をはしりまわって、町の門からそとへでていったということだけでした。さて、それからカイがど

んなことになってしまったか、たれもしっているものはありませんでした。いくにんもの人のなみだが、この子のために、そそがれました。そして、あのゲルダは、そのうちでも、ひとり、もうながいあいだ、むねのやぶれるほどになきました。——みんなのうわさでは、カイは町のすぐそばを流れている川におちて、おぼれてしまったのだらうということでした。ああ、まったくながいながい、いんきな冬でした。

いま、春はまた、あたたかいお日さまの光とつれだつてやってきました。

「カイちゃんも死んでしまったのよ。」と、ゲルダはいいました。「わたしはそうおもわないね。」と、お日さまがいました。



「カイちゃんも死んでしまったのよ。」と、ゲルダはつばめにいいました。

「わたしはそうおもいません。」と、つばめたちはこたえました。そこで、おしまいに、ゲルダは、じぶんでも、カイは死んだのではないと、おもうようになりました。

「あたし、あたらしい赤いくつをおろすわ。あれはカイちゃんのもまだみなかつたくつよ。あれをはいて川へおりて行って、カイちゃんのことをきいてみましょう。」と、ゲルダは、ある朝いいました。で、朝はやかったので、ゲルダはまだねむっていたおばあさまに、せつぷんして、赤いくつをはき、たったひとりぼっちで、町の門を出て、川のほうへあるいていきました。

「川さん、あなたが、わたしのすきなおともだちを、とっていつてしまったというのは、ほんとうなの。この赤いくつをあげるわ。そのかわり、カイちゃんをかえしてね。」

すると川の水が、よしよしというように、みように波だつてみえたので、ゲルダはじぶんのもっているもののなかでいちばんすきだった、赤いくつをぬいで、ふたつとも、川のなかになげこみました。ところが、くつは岸の近くにおちたので、さざ波がすぐ、ゲルダの立っているところへ、くつをはこんできてしまいました。まるで川は、ゲルダから、いちばんだいじなものをもらうことなのぞんでいないように見えました。なぜなら、川はカイをかくしてはいなかったからです。けれど、ゲルダは、くつをもつとお

くのほうへなげないからいけないのだとおもいました。そこで、あしのしげみにうかんでいた小舟にのりました。そして舟のいちばんはしへいって、そこからくつをなげこみました。でも、小舟はしつかりと岸にもやってなかつたので、くつをなげるので動かしたひょうしに、岸からすべり出してしまいました。それに関がついて、ゲルダは、いそいでひつかえそうとしましたが、小舟のこちらのはしまでこないうちに、舟はにさんじやく二三尺も岸からはなれて、そのまま、どんどんはやく流れていきました。

そこで、ゲルダは、たいそうびつくりして、なきだしましたが、すずめのほかは、たれもその声をきくものはありませんでした。すずめには、ゲルダをつれかえる力はありませんでした。でも、

すずめたちは、岸にそつてとびながら、ゲルダをなくさめるように、

「だいじょうぶ、ぼくたちがいます。」と、なきました。

小舟は、ずんずん流れにはこぼれていきました。ゲルダは、足にくつしたをはいただけで、じつと舟のなかにすわったままできました。ちいさな赤いくつは、うしろのほうで、ふわふわいていました。小舟においつくことはできませんでした。小舟のほうは、くつよりも、もつとはやくながれていったからです。

岸は、うつくしいけしきでした。きれいな花がさいていたり、古い木が立っていたり、ところどころ、なだらかな土手どてには、ひつじやめうしが、あそんでいました。でも、にんげんの姿は見え

ませんでした。

「ことによると、この川は、わたしを、カイちゃんのところへ、つれていってくれるのかもしれないわ。」と、ゲルダはかんがえました。

それで、だんだんげんきがでてきたので、立ちあがって、ながいあいだ、両方の青あおとうつくしい岸をながめていました。それからゲルダは、大きなさくらんぼばたけのところに来ました。

そのはたけの中には、ふうがわりな、青や赤の窓のついた、一軒のちいさな家がたっていました。その家はかやぶきで、おもてには、舟で通りすぎる人たちのほうにむいて、木製のふたりのへいたいが、銃じゅうけん剣けん肩けんに立っていました。

ゲルダは、それをほんとうのへいたいかとおもって、こえをか
けました。しかし、いうまでもなくそのへたいは、なんのこた
えもしませんでした。ゲルダはすぐそのそばまできました。波が
小舟を岸のほうにはこんだからです。

ゲルダはもつと大きなこえで、よびかけてみました。すると、
その家のなかから、しゅもくづえ 撞木杖にすがった、たいそう年とつたおば
あさんが出てきました。おばあさんは、目のさめるようにきれい
な花をかいた、大きな夏ぼうしをかぶっていました。

「やれやれ、かわいそうに。どうしておまえさんは、そんなに大
きな波のたつ上を、こんなとおいところまで流れてきたのだね。」
と、おばあさんはいいました。

それからおばあさんは、ざぶりざぶり水の中にはいつて、撞木杖で小舟をおさえて、それを陸おかのほうへひっぱってきて、ゲルダをだきおろしました。ゲルダはまた陸にあがることのできたのをうれしいとおもいました。でも、このみなれないおばあさんは、すこし、こわいようでした。

「さあ、おまえさん、名まえをなんといいのだから、またどうして、ここへやってきたのだから、話してごらん。」と、おばあさんはいきました。そこでゲルダは、なにもかも、おばあさんに話しました。おばあさんはうなずきながら、「ふん、ふん。」と、いいました。ゲルダは、すっかり話してしまつてから、おばあさんがカイをみかけなかったかどうか、たずねますと、おばあさんは、カ

イはまだここを通らないが、いずれそのうち、ここを通るかもしれない。まあ、そう、くよくよおもわないで、花をながめたり、さくらんぼをたべたりしておいで。花はどんな絵本のよりも、ずっときれいだし、その花びらの一まい、一まいが、ながいお話をしてくれるだろうからといたしました。それからおばあさんは、ゲルダの手をとって、じぶんのちいさな家へつれていって、中から戸にかぎをかけました。

その家の窓は、たいそう高くて、赤いのや、青いのや、黄いろの窓ガラスだったので、お日さまの光はおもしろい色にかわつて、きれいに、へやのなかにさしこみました。つくえの上には、とてもおいしいさくらんぼがおいてありました。そしてゲルダは、い

くらたべてもいいという、おゆるしがでたものですから、おもう
ぞんぶんそれをたべました。ゲルダがさくらんぼをたべているあ
いだに、おばあさんが、金のくしで、ゲルダのかみの毛をすきま
した。そこで、ゲルダのかみの毛は、ばらの花のような、まるっ
こくて、かわいらしい顔のまわりで、金色にちりちりまいて、光
っていました。

「わたしは長いあいだ、おまえのような、かわいらしい女の子が
ほしいとおもっていたのだよ。さあこれから、わたしたちといっ
しよに、なかよくくらそうね。」と、おばあさんはいいました。
そしておばあさんが、ゲルダのかみの毛にくしをいれてやってい
るうちに、ゲルダはだんだん、なかよしのカイのことなどはわす

れてしまいました。というのは、このおばあさんは魔法まほうが使えるからでした。けれども、おばあさんは、わるい魔女まじよではありません。おばあさんはじぶんのたのしみに、ほんのすこし魔法を使うだけで、こんども、それをつかったのは、ゲルダをじぶんの手もとにおきたいためでした。そこで、おばあさんは、庭へ出て、そのぼらの木にむかって、かたっぱしから撞木杖をあてました。すると、いままでうつくしく、さきほこっていたぼらの木も、みんな、黒い土の中にしずんでしまったので、もうたれの目にも、どこにいままでぼらの木があったか、わからなくなりました。おばあさんは、ゲルダがぼらを見て、自分の家のぼらのことをかながえ、カイのことをおもいだして、ここからにげていって

しまうといけないとおもったのです。

さて、ゲルダは花ぞのにあんないされました。——そこは、まあなんといい、いい香りがあふれていて、目のさめるように、きれいなところでしたろう。花という花は、こぼれるようにさいっていました。そこでは、一ねんじゆう花がさいっていました。どんな絵本の花だって、これよりうつくしく、これよりにぎやかな色にさいてはいませんでした。ゲルダはおどりあがってよろこびました。そして夕日が、高いさくらの木のむこうにはいつてしまいうまで、あそびました。それからゲルダは、青いすみれの花がいつぱいつまった、赤い絹のクシヨンのある、きれいなベッドの上で、結婚式の日の女王さまのような、すばらしい夢をむすびました。

そのあくる日、ゲルダは、また、あたたかいお日さまのひかりをあびて、花たちとあそびました。こんなふうにして、いく日もいく日もたちました。ゲルダは花ぞのの花をのこらずしりました。そのくせ、花ぞのの花は、かずこそずいぶんたくさんありましたけれど、ゲルダにとっては、どうもまだなにか、ひといたりないようにおもわれました。でも、それがなんの花であるか、わかりませんでした。するうちある日、ゲルダはなにげなくすわって、花をかいたおばあさんの夏ぼうしを、ながめていましたが、その花のうちで、いちばんうつくしいのは、ばらの花でした。おばあさんは、ほかのばらの花をみんな見えないように、かくしたくせに、じぶんのぼうしにかいたばらの花を、けすことを、ついわす

れていたのです。まあ手ぬかりということ、たれにでもあるものです。

「あら、ここのお庭には、ばらがないわ。」と、ゲルダはさげびました。

それから、ゲルダは、花ぞのを、いくどもいくども、さがしまわりましたけれども、ばらの花は、ひとつもみつきりませんでした。そこで、ゲルダは、花ぞのにすわってなきました。ところが、なみだが、ちょうどばらがうずめられた場所の上におちました。あたたかいなみだが、しつとりと土をしめらすと、ばらの木は、みるみるしずまない前とおなじように、花をいっぱいつけて、地の上にあらわれてきました。ゲルダはそれをだいて、せつぷんし

ました。そして、じぶんのうちのばらをおもいだし、それといっしよに、カイのこともおもいだしました。

「まあ、あたし、どうして、こんなところにひきとめられていたのかしら。」と、ゲルダはいいました。「あたし、カイちゃんをさがさなくてはならなかったのだわ——カイちゃん、どこにいるか、しらなくって。あなたは、カイちゃんが死んだとおもって。」と、ゲルダは、ばらにききました。

「カイちゃんは死にはしませんよ。わたしどもは、いままで地のなかにいました。そこには死んだ人はみないましたが、でも、カイちゃんはみえませんでしたよ。」と、ばらの花がこたえました。「ありがとう。」と、ゲルダはいつて、ほかの花のところへいつ

て、ひとつつひとつ、うてなのなかをのぞきながらたずねました。

「カイちゃんはどこにいるか、しらなくって。」

でも、どの花も、日なたぼっこしながら、じぶんたちのつくつたお話や、おとぎばなしのことばかりかんがえていました。ゲルダはいろいろと花にきいてみましたが、どの花もカイのことについてには、いっこうにしりませんでした。

ところで、おにゆりは、なんといったでしょう。

「あなたには、たいこの音が、ドンドンというのがきこえますか。あれには、ふたつの音しかないので。だからドンドンといつてもやっているのです。女たちがうたう、とむらいのうたをおききなさい。また、坊^{ぼう}さんのあげる、おいのりをおききなさい。――

インド人のやもめは、火葬のたきぎのつまれた上に、ながい赤いマントをまとって立っています。焰ほのおがその女と、死んだ夫おつとのしかばねのまわりにたちのぼります。でもインドの女は、ぐるりにあつまつた人たちのなかの、生きているひとりの男のことをかंगाえているのです。その男の目は焰よりもあつくもえ、その男のやくような目つきは、やがて、女のからだをやきつくして灰にする焰などよりも、もっとはげしく、女の心の中で、もえていたので。心の焰は、火あぶりのたきぎのなかで、もえつきるものでしようか。」

「なんのことだか、まるでわからないわ。」と、ゲルダがこたえました。

「わたしの話はそれだけさ。」と、おにゆりはいいました。

ひるがおは、どんなお話をしたでしょう。

「せまい山道のむこうに、昔のさむらいのお城がぼんやりみえます。くずれかかった、赤い石がきのうえには、つたがふかくおいしげって、ろだいのほうへ、ひと葉ひと葉、はいあがっています。ろだいの上には、うつくしいおとめが、らんかんによりかかって、おうらいをみおろしています。どんなばらの花でも、そのおとめほど、みずみずとは枝にさきだしません。どんなりんごの花でも、こんなにかるがるとしたふうに、木から風がはこんでくることはありません。まあ、おとめのうつくしい絹の着物のさらさらなること。」

あの人はまだこないのかしら。」

「あの人というのは、カイちゃんのことなの。」と、ゲルダがたずねました。

「わたしは、ただ、わたしのお話をしただけ。わたしの夢をね。」と、ひるがおはこたえました。

かわいい、まつゆきそうは、どんなお話をしたでしょう。

「木と木のあいだに、つなでつるした長い板がさがっています。ぶらんこなの。雪のように白い着物を着て、ぼうしには、ながい、緑色の絹のリボンをまいた、ふたりのかわいらしい女の子が、それにつけてゆられています。この女の子たちよりも、大きい男きようだいが、そのぶらんこに立ってのつています。男の子は、か

た手にちいさなお皿をもってるし、かた手には土製のパイプをにぎっているの、からだをささえるために、つないうでをまきつけています。男の子はシャボンだまをふいているのです。ぶらんこがゆれて、シャボンだまは、いろんなうつくしい色にかわりながらとんで行きます。いちばんおしまいシャボンだまは、風にゆられながら、まだパイプのところについています。ぶらんこはとぶようにゆれています。あら、シャボンだまのように身のかるい黒犬があと足で立って、のせてもらおうとしています。ぶらんこはゆれる、黒犬はひっくりかえって、ほえているわ。からかわれて、おこっているのね。シャボンだまははじけます。——ゆれるぶらんこ。われてこわれるシャボンだま。——これがわたしの

歌なんです。」

「あなたのお話は、とてもおもしろそうね。けれどあなたは、かなしそうに話しているのね。それからあなたは、カイちゃんのことは、なんにも話してくれないのね。」

ヒヤシンスの花は、どんなお話をしたでしょう。

「あるところに、三人の、すきとおるようにうつくしい、きれいな姉いもうとがおりました。なかでいちばん上のむすめの着物は赤く、二ばん目のは水色で、三ばん目のはまっ白でした。きょうだいたちは、手をとりあつて、さえた月の光の中で、静かな湖みずうみのふちにでて、おどりをおどります。三人とも妖女ようじよではなくて、にんげんでした。そのあたりには、なんとなくあまい、いいにお

いがしていました。むすめたちは森のなかにきえました。あまい、いいにおいが、いつそうつよくなりました。すると、その三人のうつくしいむすめをいれた三つのひつぎが、森のしげみから、すうつとあらわれてきて、湖のむこうへわたっていきました。つちぼたるが、そのぐるりを、空に舞^まっているちいさなともしびのよう^うに、ぴかりぴかりしていました。おどりくるつていた三人のむすめたちは、ねむったのでしょうか。死んだのでしょうか。——花のにおいはいました。あれはなきがらです。ゆうべの鐘^{かね}がなくなつたひとたちをとむらいます。」

「ずいぶんかなしいお話ね。あなたの、そのつよいにおいをかぐと、あたし死んだそのむすめさんたちのことを、おもいださずに

はいられませんわ。ああ、カイちゃんは、ほんとうに死んでしまったのかしら。地のなかにはいつていたばらの花は、カイちゃん
は死んではないないといってるけれど。」

「チリン、カラン。」と、ヒヤシンスのすずがなりました。「わたしはカイちゃんのために、なっているではありません。カイちゃんなんて人は、わたしたち、すこしもしりませんもの。わたしたちは、ただ自分のしっているたつたひとつの歌を、うたっているだけです。」

それから、ゲルダは、緑の葉のあいだから、あかるくさいいてる、たんぽぽのところへいきましました。

「あなたはまるで、ちいさな、あかるいお日さまね。どこにわた

しのおともだちがいるか、しつていたらおしえてくださいな。」と、ゲルダはいいました。

そこで、たんぽぽは、よけいあかるくひかりながら、ゲルダのほうへむきました。どんな歌を、その花がうたったでしょう。その歌も、カイのことではありませんでした。

「ちいさな、なか庭には、春のいちばんはじめの日、うららかなお日さまが、あたたかに照っていました。お日さまの光は、おとなりの家の、まっ白なかべの上から下へ、すべりおちていました。そのそばに、春いちばんはじめにさく、黄色い花が、かがやく光の中に、金のようにさいていました。おばあさんは、いすをそとにだして、こしをかけていました。おばあさんの孫の、かわいそ

うな女中ぼうこうをしているうつくしい女の子が、おばあさんにあうために、わずかなおひまをもらって、うちへかえってきました。女の子はおばあさんにせつぷんしました。このめぐみおおいせつぷんには金^{きん}が、こころの金^{きん}がありました。その口にも金、そのふむ土にも金、そのあさのひとときにも金がありました。これがわたしのつまらないお話です。」と、たんぽぽがいました。

「まあ、わたしのおばあさまは、どうしていらっしやるかしら。」と、ゲルダはためいきをつきました。「そうよ。きつとおばあさまは、わたしにあいたがって、かなしがっていらっしやるわ。カイちゃんがいなくなったとおなじように、しんぱいしていらっしやるわ。けれど、わたし、じきにカイちゃんをつれて、うちにか

えられるでしょう。——もう花たちにいくらたずねてみたってしかたがない。花たち、ただ、自分の歌をうたうだけで、なんにもこたえてくれないのだもの。」

そこでゲルダは、はやくかけられるように、着物をきりりとたくしあげました。けれど、黄^きずいせんを、ゲルダがとびこえようとしたとき、それに足がひっかかりました。そこでゲルダはたちどまって、その黄色い、背の高い花にむかつてたずねました。

「あんた、カイちゃんのこと、なんか知っているの。」

そしてゲルダは、こごんで、その花の話すことをききました。その花はなんといったでしょう。

「わたし、じぶんがみられるのよ。じぶんがわかるのよ。」と、

黄ずいせんはいいました。「ああ、ああ、なんてわたしはいいに
おいがするんだらう。屋根うらのちいさなへやに、半はだかの、
ちいさなおどりこが立っています。おどりこはかた足で立ったり、
両足で立ったりして、まるで世界中をふみつけるように見えます。
でも、これはほんの目のまよいです。おどりこは、ちいさな布ぬのに、
湯わかしから湯をそそぎます。これはコルセットです。——そう
です。そうです、せいけつがなによりです。白い上着うわぎも、くぎに
かけてあります。それもまた、湯わかしの湯であらって、屋根で
かわかしたもののなのです。おどりこは、その上着をつけて、サフ
ラン色のハンケチをくびにまきました。ですから、上着はよけい
白くみえました。ほら、足をあげた。どう、まるでじくの上に立

つて、うんとふんばった姿は。わたし、じぶんが見えるの。じぶんがわかるの。」

「なにもそんな話、わたしにしなくてもいいじゃないの。そんなこと、どうだって、かまわないわ。」と、ゲルダはいいました。

それでゲルダは、庭のむこうのはしまでかけて行きました。その戸はしまつていましたが、ゲルダがそのさびついたとつてを、どんとおしたので、はずれて戸はぱんとひらきました。ゲルダはひろい世界に、はだしのままでとびだしました。ゲルダは、三度どもあとをふりかえってみましたが、たれもおっかけてくるものはありませんでした。とうとうゲルダは、もうとてもはしる事ができなくなつたので、大きな石の上にこしをおろしました。そこ

らをみまわしますと、夏はすぎて、秋がふかくなっていました。お日さまが年中かがやいて、四季しきの花がたえずさいていた、あのうつくしい花ぞのでは、そんなことはわかりませんでした。

「ああ、どうしましょう。あたし、こんなにおくれてしまった。と、ゲルダはいいました。「もうとうに秋になっているのね。さあ、ゆつくりしてはいられないわ。」

そしてゲルダは立ちあがって、ずんずんあるきだしました。まあ、ゲルダのかよい足は、どんなにいたむし、そして、つかれていたことでしょう。どこも冬がれて、わびしいけしきでした。ながいやなぎの葉は、すっかり黄ばんで、きりが雨しずくのように枝からたれていました。ただ、とげのある、こけもだけは、

まだ実^みをむすんでいましたが、こけももはすっぱくて、くちがまがるようでした。ああ、なんてこのひろびろした世界は灰色で、うすぐらくみえたことでしょう。

第四のお話

王子と王女

ゲルダは、またも、やすまなければなりませんでした。ゲルダがやすんでいた場所の、ちょうどむこうの雪の上で、一わの大きなからすが、ぴよんぴよんやっています。このからすは、しばらくじつとしたなりゲルダをみつめて、あたまをふっていました。が、やがてこういいました。

「カア、カア、こんちは。こんちは。」

からすは、これよりよくは、なにもいうことができませんでしたが、でも、ゲルダをなつかしくおもっていて、このひろい世界で、たったひとりぼっち、どこへいくのだといって、たずねました。この「ひとりぼっち。」ということばを、ゲルダはよくあじわって、しみじみそのことばに、ふかいみのももっていることをおもいました。ゲルダはそこでからすに、じぶんの身の上のことをすつかり話してきかせた上、どうかしてカイをみなかったか、たずねました。

するとからすは、ひどくまじめにかんがえこんで、こういいました。

「あれかもしれない。あれかもしれない。」



「え、しつてて。」と、ゲルダは大きなこえでいって、からすをらんぼうに、それこそいきのとまるほどせつぶんしました。

「おてやわらかに、おてやわらかに。」と、からすはいいました。「どうも、カイちゃんをしつているような気がします。たぶん、あれがカイちゃんだろうとおもいますよ。けれど、カイちゃんは、王女さまのところにおいて、あなたのことなどは、きつとわすれていますよ。」

「カイちゃんは、王女さまのところにいるんですって。」と、ゲルダはききました。

「そうです。まあ、おききなさい。」と、からすはいいました。「どうも、わたしにすると、にんげんのことばで話すのは、たい

そうなほねおりです。あなたにからすのことばがわかると、ずっとうまく話せるのだからなあ。」

「まあ、あたし、ならつたことがなかったわ。」と、ゲルダはいました。「でも、うちのおばあさまは、おできになるのよ。あたし、ならつておけばよかった。」

「かまいませんよ。」と、からすはいいました。「まあ、できるだけ試みますから。うまくいけばいいが。」

それからからすは、しっていることを、話しました。

「わたしたちがいまいる国には、たいそうかしこい王女さまがおいでなるのです。なにしろ世界中のしんぶんをのこらず読んで、のこらずまたわすれてしまいます。まあそんなわけで、たいそう

りこうなかたなのです。さて、このあいだ、王女さまは玉座ぎよくざにおすわりになりました。玉座というものは、せけんというほどののしいものではありません。そこで王女さまは、くちずさみに歌をうたいだしました。その歌は『なぜに、わたしは、むことらぬ』といった歌でした。そこで、『なるほど、それももつともだわ。』と、いうわけで、王女さまはけっこんしようとおもいました。でも夫おつとにするなら、ものをたずねても、すぐとこたえるようなのがほしいとおもいました。だって、ただそこにつつ立つて、ようすぶっているだけでは、じきにたいくつしてしまいますからね。そこで、王女さまは、女官じよかんたち、のこらずおめしになつて、このもくろみをお話になりました。女官たちは、たいそうおもし

ろくおもいまして、

『それはよいおもいつきでございます。わたくしどもも、ついさきごろ、それとおなじことをかんがえついたしだいです。』などと申しました。

「わたしのいつていることは、ごく、ほんとうのことなのでですよ。」と、からすはいつて、「わたしには、やさしいいなづけがあつて、その王女さまのお城に、自由にとんでいける、それがわたしにすっかり話してくれたのです。」と、いいそえました。

いうまでもなく、その、いいなづけというのはからすでした。というのは、にたものどうしで、からすはやはり、からすなかまであつまります。

ハートと、王女さまのかしらもじでふちどったしんぶんが、さつそく、はっこうされました。それには、ようすのりっぱな、わかい男は、たれでもお城にきて、王女さまと話すことができる。そしてお城へきても、じぶんのうちにいるように、気やすく、じょうずに話した人を、王女は夫としてえらぶであろうということがかいてありました。

「そうです。そうです。あなたはわたしをだいじょうぶ信じてください。この話は、わたしがここにこうしてすわっているのとどうよう、ほんとうの話なのですから。」と、からすはいいました。「わかい男の人たちは、むれをつくつて、やってきました。そしてたいそう町はこんぎつして、たくさんの人が、あっちへいった

り、こつちへきたり、いそがしそうにかけずりまわっていました。でもはじめの日も、つぎの日も、ひとりだつてうまくやったものはありません。みんなは、お城のそとでこそ、よくしゃべりましたが、いちどお城の門をはいって、銀づくめのへいたいをみたり、かいだんをのぼって、金ぴかのせいふくをつけたお役人に出あつて、あかるい大広間にはいると、とたんにぼうつとなつてしまいました。そして、いよいよ王女さまのおいでになる玉座の前に出たときには、たれも王女さまにいわれたことばのしりを、おうむがえしにくりかえすほかありませんでした。王女さまとすれば、なにもじぶんのいったことばを、もういちどいつてもらつてもしかたがないでしょう。ところが、だれも、ごてんのなかにはいる

と、かぎたばこでものまされたように、ふらふらで、おうらいへ
でてきて、やつとわれにかえつて、くちがきけるようになる。な
にしろ町の門から、お城の門まで、わかひひとたちが、れつをつ
くつてならんでいました。わたしはそれをじぶんで見てきました
よ。」と、からすが、ねんをおしていいました。

「みんなは自分のぼんが、なかなかまわつてこないの、おなか
がすいたり、のどがかわいたりしましたが、ごてんの中では、な
まぬるい水いっぱいくれませんでした。なかで気のきいたせんせ
いたちが、バタパンご持参で、やってきていましたが、それをそ
ばの人にわけようとはしませんでした。このれんじゅうの気では
——こいつら、たんとひもじそうな顔をしているがいい。おかげ

で王女さまも、ごさいようになるまいから——というのでしよう。
」

「でも、カイちゃんはどうしたのです。いつカイちゃんはやってきたのです。」と、ゲルダはたずねました。「カイちゃんは、その人たちのなかまにいたのですか。」

「まあまあ、おまちなさい。これから、そろそろ、カイちゃんのことになるのです。ところで、その三日目に、馬にも、馬車にもならないちいさな男の子が、たのしそうにお城のほうへ、あるいていきました。その人の目は、あなたの目のようにかがやいて、りっぱな、長いかみの毛をもっていました。着物はぼろぼろにきれていました。」

「それがカイちゃんなのね。ああ、それでは、とうとう、あたし、カイちゃんをみつけたわ。」と、ゲルダはうれしそうにさげんで、手をたたきました。

「その子は、せなかに、ちいさなはいのうをしよっていました。」と、からすがいいました。

「いいえ、きつと、それは、そりよ。」と、ゲルダはいいました。「カイちゃんは、そりといっしよに見えなくなってしまうたのですもの。」

「なるほど、そうかもしれません。」と、からすはいいました。

「なにしろ、ちよつと見ただけですから。しかし、それは、みんなわたしのやさしいいなすけからきいたのです。それから、そ

の子はお城の門をはいって、銀の軍服ぐんぷくのへいたいをみながら、だんをのぼって、金ぴかのせいふくのお役人の前にでましたが、すこしもまごつきませんでした。それどころか、へいきでえしやくして、

『かいだんの上に立っているのは、さぞたいくつでしょうね。ではごめんこうむって、わたしは広間にはいらせてもらいましょう。』と、いいました。広間にはあかりがいつぱいついて、すうみつ枢密顧問官こもんかんや、身分の高い人たちが、はだしで金の器うつわをはこんであるいていました。そんな中で、たれだって、いやでもおごそかなきもちになるでしょう。ところへ、その子のながぐつは、やけにやかましくギユウ、ギユウなるのですが、いっこうにへいきでし

た。」

「きつとカイちゃんよ。」と、ゲルダがさげびました。

「だって、あたらしい長ぐつをはいていましたもの。わたし、そのくつがギユウ、ギユウいうのを、おばあさまのへやできいたわ
。」

「そう、ほんとうにギユウ、ギユウつてなりましたよ。」と、か
らすはまた話しはじめました。

「さて、その子は、つかつかと、糸車ほどの大きなしんじゆに、
こしをかけている、王女さまのご前ぜんに進みました。王女さまのぐ
るりをとりまいて、女官たちがおつきを、そのおつきがまたおつ
きを、したがえ、侍じしゅう従がけらいの、またそのけらいをしたがえ、

それがまた、めいめいこしように小姓をひきつれて立っていました。しかも、とびらの近くに立っているものほど、いばっているように見えませんでした。しじゅう、うわぐつであるきまわっていた、けらいのけらいの小姓なんか、とてもあおむいて顔が見られないくらいでした。とにかく、戸ぐちのところではいばりかえっているふうは、ちよつと見ものでした。」

「まあ、ずいぶんこわいこと。それでもカイちゃんは、王女さまとけつこんしたのですか。」と、ゲルダはいいました。

「もし、わたしがからすでなかったなら、いまのいいなずけをすてても、王女さまとけつこんしたかもしれません。人のうわさによりますと、その人は、わたしがからすのことばを話すときとど

うよう、じょうずに話したということでした。わたしは、そのことを、わたしのいいなずけからきいたのです。どうして、なかなかよすのいい、げんきな子でした。それも王女さまとけっこうするたけにきたのではなくて、ただ、王女さまがどのくらいかしいか知ろうとおもってやってきたのですが、それで王女さまがすきになり、王女さまもまたその子がすきになったというわけです。」

「そう、いよいよ、そのひと、カイちゃんにちがいないわ。カイちゃんは、そりやりこうで、分数まであんざんでやれますもの——ああ、わたしを、そのお城へつれていってくださいらないこと。」と、ゲルダはいいました。

「さあ、くちでいうのはたやすいが、どうしたら、それができるか、むずかしいですよ。」と、からすはいいました。「ところで、まあ、それをどうするか、まあ、わたしのいいなずけにそうだんしてみましよう。きつと、いいちえをかしてくれるかもしれません。なにしろ、あなたのような、ちいさな娘さんが、お城の中にはいることは、ゆるされていないのですからね。」

「いいえ、そのおゆるしならもらえてよ。」と、ゲルダがこたえました。「カイちゃんは、わたしがきたときけば、すぐに出てきて、わたしをいれてくれるでしょう。」

「むこうのかきねのところで、まっぴらつしやい。」と、からすはいって、あたまをふりふりとんでいってしまいました。

そのからすがかえってきたときには、晩もだいぶくらくなくなっていました。

「すてき、すてき。」と、からすはいいました。「いいなずけが、あなたよろしくとのことでしたよ。さあ、ここに、すこしばかりパンをもつてきてあげました。さぞ、おなががすいたでしょう。いいなずけが、だいどころからもつてきたのです。そこにはたくさんまだあるのです。——どうも、お城へはいることは、できそうもありませんよ。なぜといって、あなたはくつをはいていませんから、銀の軍服のへいたいや、金ぴかのせいふくのお役人たちが、ゆるしてくれないでしょうからね、だがそれで泣いてはいけません。きつと、つれて行けるくふうはしますよ。わたしのいいな

ずけは、王女さまのねまに通じている、ほそい、うらばしごをしつていますし、そのかぎのあるところもしつていのですからね。

そこで、からすとゲルダとは、お庭をぬけて、木の葉があとからあとからと、ちつてくる並木道なみきみちを通りました。そして、お城のあかりが、じゅんじゅんにきえてしまったとき、からすはすこしあいているうらの戸口へ、ゲルダをつれていきました。

まあ、ゲルダのむねは、こわかったり、うれしかったりで、なんでどきどきしたことでしょう。まるでゲルダは、なにかわるいことでもしているような気がしました。けれど、ゲルダはその人が、カイちゃんであるかどうかをしりたい、いっしんなのです。

そうです。それはきつと、カイちゃんにちがいありません。ゲルダは、しみじみとカイちゃんのリこうそうな目つきや、長いかみの毛をおもいだしていました。そして、ふたりがうちにいて、ばらの花のあいだにすわってあそんだとき、カイちゃんがわらったとおりの笑顔えがおが、目にうかびました。そこで、カイちゃんにあって、ながいながい道中をして自分をさがしにやってきたことをきき、あれなりかえらないので、どんなにみんなが、かなしんでいるかしたなら、こうしてきてくれたことを、どんなによろこぶでしょう。まあ、そうおもうと、うれしいし、しんぱいでした。

さて、からすとゲルダとは、かいだんの上へのぼりました。ちいさなランプが、たなの上についていました。そして、ゆか板の

まん中のところには、飼いならされた女がらすが、じつとゲルダを見て立っていました。ゲルダはおばあさまからおそわったように、ていねいにおじぎしました。

「かわいいおじょうさん。わたしのいいなずけは、あなたのことを、たいそうほめておりました。」と、そのやさしいからすがいきました。「あなたの、そのごけいれきとやらもうしますのは、ずいぶんおきのどくなのですね。さあ、ランプをおもちください。ごあんないしますわ。このところをまっすぐにまいりましょう。もうだれにもあいせんから。」

「だれか、わたしたちのあとから、ついてくるような気がする」とね。」と、なにかがそばをきゆうに通ったときに、ゲルダはい

いました。それは、たてがみをふりみだして、ほつそりとした足をもっている馬だの、それから、かりうどだの、馬にのったりつぱな男の人や、女の人だの、それがみんなかべにうつったかげのように見えました。

「あれは、ほんの夢なのですわ。」と、からすがいいました。

「あれらは、それぞれのご主人たちのところを、りようにさそいだそうとしてくるのです。つごうのいいことに、あなたは、ねどこの中であのひとたちのお休みのところがよくみられます。そこで、どうか、あなたがりつぱな身分におなりになったのちも、せわになったおれいはい、おわすれなくね。」

「それはいうまでもないことだろうよ。」と、森のからすがいい

ました。

さて、からすとゲルダとは、一ばんはじめの広間にはいつていききました。そこのかべには、花でかざった、ばら色のしゆすが、上から下まで、はりつめられていました。そして、ここにもりょうにさそうさっきの夢は、もうとんで来ていましたが、あまりはやくうごきすぎて、ゲルダはえらいとの殿さまや貴婦人方きふじんを、こんどはみることができませんでした。ひろまから、ひろまへ行くほど、みどとにできていました。ただもうあまりのうつくしさに、まごつくばかりでしたが、そのうち、とうとうねままではいつていききました。そのてんじようは、高価なガラスの葉をひろげた、大きなしゆるの木のかたちになっていました。そして、へやのまん

なかには、ふたつのベッドが、木のじくにあたる金のふとい柱につりさがっていて、ふたつとも、ゆりの花のようにみえました。

そのベッドはひとつは白くて、それには王女がねむっていました。もうひとつのは赤くて、そこにねむっている人こそ、ゲルダのさがすカイちゃんではなくてはならないのです。ゲルダは赤い花びらをひとひら、そつとどけると、そこに日やけしたくびすじが見えました。——ああ、それはカイちゃんでした。

——ゲルダは、カイちゃんの名をこえ高くよびました。ランプをカイちゃんのほうへさしました。……夢がまた馬にのつて、さわがしくそのへやの中へ、はいつてきました。……その人は目をさまして、顔をこちらにむけました。ところが、それはカイち

やんではなかったのです。

いまは王子となつたその人は、ただ、くびすじのところか、カイちゃんににっていただけでした。でもその王子はわかくて、うつくしい顔をしていました。王女は白いゆりの花ともみえるベッドから、目をぱちくりやつて見あげながら、たれがそこにきたのかと、おたずねになりました。そこでゲルダは泣いて、いままでのことや、からすがいろいろにつくしてくれたことなどを、のこらず王子に話しました。

「それは、まあ、かわいそうに。」と、王子と王女とがいました。そして、からすをおほめになり、じぶんたちはけつして、からすがしたことをおこりはしないが、二どとこんなことをしてく

れるな、とおっしゃいました。それでも、からすたちは、ごほうびをいただくことになりました。

「おまえたちは、すきかつてに、そとをとびまわっているほうがいいかい。」と、王女はたずねました。「それとも、宮中おかげのからすとして、台所のおあまりは、なんでもたべることができると、そういうふうにして、いつまでもごてんにいたいとおもうかい。」

そこで、二わのからすはおじぎをして、自分たちが、としをとつてからのことをかながえると、やはりごてんにおいていただきたいと、ねがいました。そして、

「だれしもいっていますように、さきへいってこまらないように、

したいものでございます。」と、いいました。

王子はそのとき、ベッドから出て、ゲルダをそれにねかせ、じぶんは、それなりねようとはしませんでした。ゲルダはちいさな手をくんで、「まあ、なんといいいや、いいからすたちだろ。」と、おもいました。それから、目をつぶって、すやすやねむりました。すると、また夢がやってきて、こんどは天使のような人たちが、一だいのそりをひいてきました。その上には、カイちゃんが手まねきしていました。けれども、それはただの夢だったので、目をさますと、さつそくきえてしまいました。

あくる日になると、ゲルダはあたまから、足のさきまで、絹やびろうどの着物でつつまれました。そしてこのままお城にとどま

っていて、たのしくくらすようにとすすめられました。でも、ゲルダはただ、ちいさな馬車と、それをひくうまと、ちいさなそくの長くつがいただきとうございますと、いいました。それでもういちど、ひろい世界へ、カイちゃんをさがしに出ていきたいのです。

さて、ゲルダは長くつばかりでなく、マツフまでもらって、さつぱりと旅のしたくができました。いよいよでかけようというとき、げんかんには、じゆん金のあたらしい馬車が一だいとまりました。王子と王女の紋章もんしょうが、星のようにひかっついてついていました。ぎよしやや、べつとうや、おさきばらいが——そうです、おさきばらいまでが——金の冠かんむりをかぶってならんでいました。王

子と王女は、ごじぶんで、ゲルダをたすけて馬車にのらせ、ぶじにいつてくるようにおっしゃいました。もういまはけつこんをすませた森のからすも、三マイルさきまで、みおくりについてきました。このからすは、うしろむきにのつていられないというので、ゲルダのそばにすわっていました。めすのほうのからすは、羽根をばたばたやりながら、門のところにとまっていました。おくつていかないわけは、あれからずっとごてんづとめで、たくさんにたべものをいただくせいか、ひどく頭痛ずっうがしていたからです。その馬車のうちがわは、さとうビスケットでできていて、こしをかけるところは、くだものや、くるみのはいったしようにパンでできていました。

「さよなら、さよなら。」と、王子と王女がさけびました。するとゲルダは泣きだしました。——からすもまた泣きました。——さて、馬車が三マイル先のところまできたとき、こんどはからすが、さよならをいいました。この上ないかなしいわかれでした。からすはその木の上にとびあがって、馬車がいよいよ見えなくなるまで、黒いつばさを、ばたばたやっていました。馬車はお日さまのようにかがやきながら、どこまでもはしりつづけました。

第五のお話

おいはぎのこむすめ

それから、ゲルダのなかまは、くらい森の中を通っていきま
した。ところが、馬車の光は、たいまつのようにちらちらしていま
した。それが、おいはぎどもの目にとまって、がまんがならなく
させました。

「やあ、金^{きん}だぞ、金だぞ。」と、おいはぎたちはさげんで、いち
どにとびだしてきました。馬をおさえて、ぎよしゃ、べつとうか

ら、おさきばらいまでころして、ゲルダを馬車からひきずりおろしました。

「こりやあ、たいそうふとつて、かわいらしいむすめだわい。きつと、年中くるみの実みばかりたべていたのだろう。」と、おいはぎばばがいました。女のくせに、ながい、こわいひげをはやして、まゆげが、目の上までたれさがったばあさんでした。「なにしろそつくり、あぶらののつた、こひつじというところだが、さあたべたら、どんな味がするかな。」

そういつて、ばあさんは、ぴかぴかするナイフをもちだしました。きれそうにひかつて、きみのわるいといったらありません。

「あッ。」



そのとたん、ばあさんはこえをあげました。その女のせなかにぶらさがっていた、こむすめが、なにしろらんぼうなただっ子で、おもしろがって、いきなり、母親の耳をかんだのです。

「このあまあ、なによをする。」と、母親はさげびました。おかげで、ゲルダをこらす、はなさきをおられました。

「あの子は、あたいといっしよにあそぶのだよ。」と、おいはぎのこむすめは、いいました。

「あの子はマツフや、きれいな着物をあたいにくれて、晩にはいっしよにねるのだよ。」

こういって、その女の子は、もういちど、母親の耳をしたたかにかみました。それで、ばあさんはとびあがって、ぐるぐるまわ

りしました。おいはぎどもは、みんなわらって、

「見ろ、ばばあが、がきといっしょにおどっているからよ。」と、
いいました。

「馬車の中へはいつてみようや。」と、おいはぎのこむすめはい
いました。

このむすめは、わんぱくにそだって、おまけにごうじょうつぱ
りでしたから、なんでもしたいとおもうことをしなければ、気が
すみませんでした。それで、ゲルダとふたり馬車にのりこんで、
きりかぶや、石のでている上を通って、林のおくへ、ふかくはい
つていききました。おいはぎのこむすめは、ちようどゲルダぐらい
の大きさでしたが、ずっと、きつそうで、肩つきががっしりして

いました。どす黒い^{くろ}はだをして、その目はまっ黒で、なんだかかなしそうに見えました。女の子は、ゲルダのこしのまわりに手をかけて、

「あたい、おまえとけんかしないうちは、あんなやつらに、おまえをころさせやしないことよ。おまえはどこかの王女じゃなくて。」と、いいました。

「いいえ、わたしは王女ではありません。」と、ゲルダはこたえて、いままでにあつたできごとや、じぶんがどんなに、すきな力イちゃんのことを思っているか、ということなどを話しました。

おいはぎのむすめは、しげしげとゲルダを見て、かるくうなずきながら、

「あたいは、おまえとけんかしたって、あのやつらに、おまえをころさせやしないよ。そんなくらいなら、あたいは、じぶんでおまえをころしてしまおうわ。」と、いいました。

それからむすめは、ゲルダの目をふいてやり、両手をうつくしいマッフにつけてみましたが、それはたいへん、ふつくりして、やわらかでした。

さあ、馬車はとまりました。そこはおいはぎのこもる、お城のひろ庭でした。その山塞さんさいは、上から下までひびだらけでした。そのずれたわれ目から、大がらす小がらすがとびまわっていました。大きなブルドッグが、あいてかまわず、にんげんでもくつてしまいそうなようすで、高くとびあがりました。でも、けっして

ほえませんでした。ほえることはとめられてあつたからです。

大きな、^{すす}煤けたひろまには、煙がもうもうしていて、たき火が、赤あかと石だたみのゆか上でもえていました。煙はてんじょうの下にたちまよつて、どこからともなくでていきました。大きなおなべには、スープがにえたつて、大うさぎ小うさぎが、あぶりぐしにさして、やかれていました。

「おまえは、こん夜は、あたいや、あたいのちいさなどうぶつといつしよにねるのよ。」と、おいはぎのこむすめがいました。

ふたりはたべものと、のみものをもらうと、わらや、しきものがしいてある、へやのすみのほうへ行きました。その上には、百ぱよりも、もつとたくさんのはとが、ねむつたように、木摺きずりや、

とまり木にとまっていたましたが、ふたりの女の子がきたときには、ちよつとこちらをむきました。

「みんな、このはと、あたいのものなのよ。」と、おいはぎのこむすめはいつて、てばやく、てぢかにいた一わをつかまえて、足をゆすぶつたので、はとは、羽根をばたばたやりました。

「せつぷんしておやりよ。」と、いつて、おいはぎのこむすめは、それを、ゲルダの顔になげつけました。

「あすこにとまっているのが、森のあばれものさ。」と、そのむすめは、かべにあけたあなに、うちこまれたとまり木を、ゆびさしながら、また話しつづけました。「あれは二わとも森のあばれものさ。しつかり、とじこめておかないと、すぐにげていつてし

まうの。ここにるのが、昔からおともだちのベーよ。」

こういって、女の子は、ぴかぴかみがいた、銅どうのくびわをはめたままつながれている、一ぴきのとなかいを、つのもってひきだしました。

「これも、しっかりつないでおかないと、にげていってしまうのだから、あたいはね、まい晩よくきれるナイフで、くびのところをくすぐってやるんだよ。すると、それはびっくりするつたらありやしない。」

そういいながら、女の子はかべのわれめのところから、ながいナイフをとりだして、それをとなかいのくびにあてて、そろそろなでました。かわいそうに、そのけものは、足をどんどんやって、

苦しがりしました。むすめは、おもしろそうにわらって、それなりゲルダをつれて、ねどこに行きました。

「あなたはねているあいだ、ナイフをはなさないの。」と、ゲルダは、きみわるそうに、それをみました。

「わたい、しよっちゆうナイフをもっているよ。」と、おいはぎのこむすめはこたえました。

「なにがはじまるかわからないからね。それよか、もういちどカイちゃんって子の話をしてくれない、それから、どうしてこのひろい世界に、あてもなくでてきたのか、そのわけを話してくれないか。」

そこで、ゲルダははじめから、それをくりかえしました。森の

はとが、頭の上のかごの中でくうくういつていました。ほかのとはねむっていました。おいはぎのこむすめは、かた手をゲルダのくびにかけて、かた手にはナイフをもったまま、大いびきをかいてねてしまいました。けれども、ゲルダは、目をつぶることもできませんでした。ゲルダは、いったい、じぶんは生かしておかれるのか、ころされるのか、まるでわかりませんでした。

たき火のぐるりをかこんで、おいはぎたちは、お酒をのんだり、歌をうたったりしていました。そのなかで、ばあさんがとんぼをきりました。ちいさな女の子にとっては、そのありさまを見るだけで、こわいことでした。

そのとき、森のはとが、こういいました。

「くう、くう、わたしたち、カイちゃんを見ましたよ。一わの白いめんどりが、カイちゃんのそりをはこんでいました。カイちゃんには雪の女王のそりにのって、わたしたちが、巣にねていると、森のすぐ上を通っていったのですよ。雪の女王は、わたしたち子ばとに、つめたいいきをふきかけて、ころしてしまいました。たすかったのは、わたしたち二わだけ、くう、くう。」

「まあ、なにをそこでいってるの。」と、ゲルダが、つい大きなこえをしました。「その雪の女王さまは、どこへいったのでしようね。そのさきのこと、なにかしっていて。おしえてよ。」

「たぶん、*ラツプランドのほうへいったのでしようよ。そこには、年中、氷や雪がありますからね。まあ、つながれている、と

なかに、きいてごらんなさい。」

*ヨーロッパ洲の極北、スカンジナビア半島の北東部、四〇万平方キロ一帯の寒い土地。遊牧民のラップ人がすむ。

すると、となかいがひきとつて、

「そこには年中、氷や雪があつて、それはすばらしいみごとなものですよ。」といいました。

「そこでは大きな、きらきら光る谷まを、自由にはしりまわることもできますし、雪の女王は、そこに夏のテントをもっています。でも女王のりっぱな本城ほんじょうは、もつと北極のほうの、*スピッツベルゲンという島の上にあるのです。」

*ノルウエーのはるか北、北極海にちかい小島群（一名スヴァルバルド）。

「ああ、カイちゃんは、すきなカイちゃんは。」と、ゲルダはためいきをつきました。

「しずかにしなよ。しないと、ナイフをからだにつきさすよ。」と、おいはぎのこむすめがいました。

あさになって、ゲルダは、森のはとが話したことを、すっかりおいはぎのこむすめに話しました。するとむすめは、たいそうまじめになって、うなずきながら、

「まあいいや。どっちにしてもおなじことだ。」と、いいました。そして、

「おまえ、ラップランドって、どこにあるのかしってるのかい。」と、むすめは、となくいにたずねました。

「わたしほど、それをよく知っているものがございましょうか。」と、目をかがやかしながら、となくいがこたえました。「わたしはそこで生まれて、そだったのです。わたしはそこで、雪の野原を、はしりまわっていました。」

「ごらん。みんなでかけていってしまうだろう。おつかさんだけがうちにいる。おつかさんは、ずっとうちののこっているのよ。でもおひるちかくなると、大きなびんからお酒をのんで、すこしのあいだ、ひるねするから、そのとき、おまえにいいことをしてあげようよ。」と、おいはぎのこむすめはゲルダにいいました。

それから女の子は、ぱんと、ねどこからはねおきて、おつかさんのくびのまわりにかじりついて、おつかさんのひげをひっぱりながら、こういいました。

「かわいい、めやぎさん、おはようございます。」

すると、おつかさんは、女の子のはなが赤くなったり紫むらさきいろ色いろになつたりするまで、ゆびではじきました。

でもこれは、かわいくてたまらない心からすることでした。

おつかさんが、びんのお酒をのんで、ねてしまったとき、おいはぎのこむすめは、となかいのところへいつて、こういいました。「わたしはもつと、なんべんも、なんべんも、ナイフでおまえを、くすぐつてやりたいのだよ。だって、ずいぶんおかしいんだもの、

でも、もういいき。あたい、おまえがラツブランドへ行けるように、つなをほどいてにがしてやろう。けれど、おまえはせつせとはしって、この子を、この子のおともだちのいる、雪の女王のごてんへ、つれていかなければいけないよ。おまえ、この子があたいに話していたこと、きいていたろう。とても大きなこえで話したし、おまえも耳をすまして、きいていたのだから。」

となかいはよろこんで、高くはねあがりました。その背中においてはぎのこむすめは、ゲルダをのせてやりました。そして用心ようじんぶかく、ゲルダをしつかりいわえつけて、その上、くらのかわりに、ちいさなふとんまで、しいてやりました。

「まあ、どうでもいいや。」と、こむすめはいいました。「そら、

おまえの毛皮のながぐつだよ。だんだんさむくなるからね。マツフはきれいだからもらっておくわ。けれど、おまえにさむいおもいはさせないわ。ほら、おつかさんの大きなまる手ぶくろがある。おまえなら、ひじのところまで、ちようどとどくだろう。まあ、これをはめると、おまえの手が、まるであたいのいやなおつかさんの手のようだよ。」と、むすめはいいました。

ゲルダは、もううれしくて、なみだ涙がこぼれました。

「泣くなんて、いやなことだね。」と、おいはぎのこむすめはいいました。「ほんとは、うれしいはずじゃないの。さあ、ここにふたつ、パンのかたまりと、ハムがあるわ。これだけあれば、ひもじいおもいはしないだろう。」

これらの品じなは、となかいの背中の中うしろにいわえつけられました。おいはぎのむすめは戸をあけて、大きな犬をだまして、中にいれておいて、それから、よくきれるナイフでつなをきると、となかいにむかつていいました。

「さあ、はしつて。そのかわり、その子に、よく気をつけてやってよ。」

そのとき、ゲルダは、大きなまる手ぶくろをはめた両手を、おいはぎのこむすめのほうにさしのばして、「さようなら。」といいました。

とたんに、となかいはかけだしました。木の根、岩かどをとびこえ、大きな森をつきぬけて、沼地や草原もかまわず、いつしよ

うけんめい、まっしぐらにはしっていきました。おおかみがほえ、わたりがらすがこえをたてました。ひゅツ、ひゅツ、空で、なにか音がしました。それはまるで花火があがったように。

「あれがわたしのなつかしい北極光オーロラです。」と、となかいがいいました。「ごらんなさい。なんてよく、かがやいているでしょう。」

それからとなかいは、ひるも夜も、前よりももつとはやくはしって行きました。

パンのかたまりもなくなりました。ハムもたべつくしました。となかいとゲルダとは、ラップランドにつきました。

第六のお話

ラップランドの女とフィンランドの女

ちいさな、そまつなこやの前で、となかいはとまりました。そのこやはたいそうみすばらしくて、やね屋根はじめん地面とすれすれのところまでも、おおいかぶさっていました。そして、戸口がたいそうひくくついているものですから、うちの人が出たり、はいったりするときには、はらばいになつて、そこをくぐらなければなりませんでした。その家には、たったひとり年とつたラップランドの



女がいて、鯨油げいゆランプのそばで、おさかなをやいていました。と
なかいはそのおばあさんに、ゲルダのことをすっかり話してきか
せました。でも、その前にじぶんのことをまず話しました。とな
かいは、じぶんの話のほうが、ゲルダの話よりたいせつだとおも
ったからでした。

ゲルダはさむさに、ひどくやられていて、口をきくことができ
ませんでした。

「やれやれ、それはかわいそうに。」と、ラツブランドの女はい
いました。「おまえたちはまだまだ、ずいぶんとおくはしって行
かなければならないよ。百マイル以上も北の*フィンマルケンの
おくふかくはいらなければならぬのだよ。雪の女王はそこにい

て、まい晩、青い光を出す花火をもやしているのさ。わたしは紙をもっていないから、干鱈ひだらのうえに、てがみをかいてあげよう。

これをフィンランドの女のところへもっておいで。その女のほうが、わたしよりもくわしく、なんでも教えてくれるだろうからね。
」。

*ノルウエーの北端、最低地方。

さてゲルダのからだもあたたまり、たべものやのみものでげんきをつけてもらったとき、ラツブランドの女は、干鱈ひだらに、ふたことみこと、もんくをかきつけて、それをたいせつにもっていくように、といっただしました。ゲルダは、またとなくいいわえつけられてでかけました。ひゅツひゅツ、空の上でまたいいました。

ひと晩中、この上もなくうつくしい青色をした、極光オーロラがもえていました。——さて、こうして、となかいとゲルダとは、フィンマルケンにつきました。そして、フィンランドの女の家のとつを、こつこつたたきました。だってその家には、戸口もついていませんでした。

家の中は、たいへんあついで、その女の人は、まるではだか同様でした。せいのひくいむさくるしいようすの女でした。女はすぐに、ゲルダの着物や、手ぶくろや、ながぐつをぬがせました。そうしなければ、とてもあつくて、そこにはいられなかつたからです。それから、となかいのあたまの上に、ひとかけ、氷のかたまりを、のせてやりました。そして、ひだらにかきつけてあるも

んくを、三べんもくりかえしてよみました。そしてすっかりおぼえこんでしまうと、スープをこしらえる大なべの中へ、たらをなげこみました。そのたらはたべることができたからで、この女の人は、けつしてどんなものでも、むだにはしませんでした。

さて、となかいは、まずじぶんのことを話して、それからゲルダのことを話しました。するとフィンランドの女は、そのりこうそうな目をしばたいたただけで、なにもいいませんでした。

「あなたは、たいそう、かしこくていらつしやいますね。」と、となかいは、いいました。「わたしはあなたが、いっぽんのより糸で、世界中の風をつなぐことがおできになると、きいております。もしも舟のりが、そのいちばんはじめのむすびめをほどくな

ら、つごうのいい追風がふきます。二ばんめのむすびめだったら、つよい風がふきます。三ばんめと四ばんめをほどくなら、森ごとふきたおすほどのあらしがふきすさみます。どうか、このむすめさんに、十二人りきがついて、しゅびよく雪の女王にかえますよう、のみものをひとつ、つくってやっていただけませんか。」

「十二人りきかい。さぞ役にたつだろうよ。」と、フィンランドの女はくりかえしていいました。

それから女の人は、たなのところへ行って、大きな毛皮のまいたものをもってきてひろげました。それには、ふしぎなもんじがかいてありましたが、フィンランドの女は、ひたいから、あせがたれるまで、それをよみかえしました。

でも、となかいは、かわいいゲルダのために、またいつしようにけんめい、その女の人にたのみました。ゲルダも目に涙をいつぱいためて、おがむように、フィンランドの女を見あげました。女はまた目をしばたたきはじめました。そして、となかいをすみのほうへつれていって、そのあたまたにあらしい氷をのせてやりながら、こうつぶやきました。

「カイって子は、ほんとうに雪の女王のお城にいるのだよ。そして、そこにあるものはなんでも気にいってしまって、世界にこないところはなとおもっているんだよ。けれどそれというのも、あれの目のなかには、鏡のかけらがはいっているし、しんぞうのなかにだって、ちいさなかけらがはいっているからなのだよ。

だからそんなものを、カイからとりだしてしまわないうちは、あれはけっしてまにんげんになることはできないし、いつまでも雪の女王のいうなりになっていることだろうよ。」

「では、どんなものにも、うちかつことのできる力になるようなものを、ゲルダちゃんにくださるわけにはいかないでしょうか。」

「このむすめに、生まれついてもっている力よりも、大きな力をさずけることは、わたしにはできないことなのだよ。まあ、それはおまえさんにも、あのむすめがいまもっている力が、どんなに大きな力かわかるだろう。ごらん、どんなにして、いろいろと人間やどうぶつが、あのむすめひとりのためにしてやっているか、どんなにして、はだしのくせに、あのむすめがよくもこんなとお

くまでやってこられたか。それだもの、あのむすめは、わたしたちから、力をえようとしてもだめなのだよ。それはあのむすめの心のなかにあるのだよ。それがかわいむじやきなこどもだというところにあるのだよ。もし、あのむすめが、自分で雪の女王のところへ、でかけて行って、カイからガラスのかけらをとりだすことができないようなら、まして、わたしたちの力におよばないことさ。もうここから二マイルばかりで、雪の女王のお庭の入口になるから、おまえはそこまで、あの女の子をはこんでいって、雪の中で、赤い実^みをつけてしげっている、大きな木やぶのところ、におろしてくるがいい。それで、もうよけいな口をきかないで、さっさとかえっておいで。」

こういつて、フィンランドの女は、ゲルダを、となかいのせなかにのせました。そこで、となかいは、ぜんそくりよくで、はしりだしました。

「ああ、あたしは、長ぐつをおいてきたわ。手ぶくろもおいてきてしまった。」と、ゲルダはさげびました。

とたんに、ゲルダは身をきるようなさむさをかんじました。でも、となかいはけつしてとまろうとはしませんでした。それは赤い実みのなった木やぶのところへくるまで、いっさんばしりに、はしりつづけました。そして、そこでゲルダをおろして、くちのところにせつぷんしました。

大つぶの涙が、となかいの頬ほおを流れました。それから、となか

いはまた、いっさんばしりに、はしっていつてしまいました。かわいそうに、ゲルダは、くつもはかず、手ぶくろもはめずに、氷にとじられた、さびしいフィンマルケンのまっただなかに、ひとりどりのこされて立っていました。

ゲルダは、いっしょうけんめいかけだしました。すると、雪の大軍が、むこうからおしよせてきました。

けれど、その雪は、空からふってくるものではありません。空は極オーロラ光にてらされて、きらきらかがやいていました。雪は地面上をまっすぐに走ってきて、ちかくにくればくるほど、形が大きくなりました。ゲルダは、いつか虫めがねでのぞいたとき、雪のひとつひらがどんなにか大きくみえたことを、まだおぼえています。

た。けれども、ここの雪はほんとうに、ずっと大きく、ずっとおそろしくみえました。この雪は生きていました。それは雪の女王の前ぜんしょう哨しょうでした。そして、ずいぶんへんてこな形をしていました。大きくてみにくい、やまあらしのようなものもあれば、かまくびをもたげて、とぐろをまいているへびのようなかつこうのものあり、毛のさかさにはえた、ふとつた小ぐまにたものもありました。それはみんなまぶしいように、ぎらぎら白くひかりました。これこそ生きた雪の大軍でした。

そこでゲルダは、いつもの主しゅの祈いのちの「われらの父」をととなえました。さむさはとてもひどくて、ゲルダはじぶんのつくいきを見ることができました。それは、口からけむりのようにたちのぼり

ました。そのいきはだんだんこくなつて、やがてちいさい、きやしやな天使になりました。それが地びたにつくといいしよに、どんどん大きくなりました。天使たちはみな、かしらにはかぶとをいただき、手には楯たてとやりをもっていました。天使の数はだんだんふえるばかりでした。そして、ゲルダが主のおいのりをおわつたときには、りっぱな天使軍の一たいが、ゲルダのぐるりを取りまいていました。天使たちはやりをふるつて、おそろしい雪のへいたいをうちたおすと、みんなちりぢりになってしまいました。そこでゲルダは、ゆうきをだして、げんきよく進んで行くことができます。天使たちは、ゲルダの手と足ををさすりました。するとゲルダは、前ほどさむさを感じなくなつて、雪の女王のお城

をめがけていそぎました。

ところで、カイは、あののち、どうしていたでしょう。それからまずお話をすすめましょう。カイは、まるでゲルダのことなど、おもってはいませんでした。だから、ゲルダが、雪の女王のごてんまできているなんて、どうして、ゆめにもおもわないことでした。

第七のお話

雪の女王のお城のできごとと そののちのお話

雪の女王のお城は、はげしくふきたまる雪が、そのままかべになり、窓や戸口は、身をきるような風で、できていました。そこには、百いじょうの広間が、じゅんにならんでいました。それはみんな雪のふきたまったものでした。いちばん大きな広間はなんマイルにもわたっていました。つよい極オーロラ光がこの広間をもてら
していて、それはただもう、ばか大きく、がらんとしていて、い

かにも氷のようにつめたく、ぎらぎらして見えました。たのしみというものの、まるでないところでした。あらしが音楽をかなでて、ほつきよくぐまがあと足で立ちあがって、氣どつておどるダンスの会もみられません。わかい白ぎつねの貴婦人きくじんのあいだに、ささやかなお茶ちやの会かいがひらかれることもありません。雪の女王の広間は、ただもうがらんとして、だだっぴろく、そしてさむいばかりでした。極光のもえるのは、まことにきそく正しいので、いつがいちばん高いか、いつがいちばんひくいかな、はつきり見ることができませんでした。このはてしなく大きながらんとした雪の広間のまん中に、なん千万という数のかけらにわれてこおった、みずうみがありました。われたかけらは、ひとつひとつおなじ形をして、



これがあつまって、りっぱな美術品になっていました。このみずうみのまん中に、お城にいるとき、雪の女王はすわっていました。そしてじぶんは理性りせいの鏡のなかにすわっているのだ、この鏡ほどのものは、世界中さがしてもない、といっていました。

カイはここにいて、さむさのため、まっ青に、というよりは、うす黒くなっていました。それでいて、カイはさむさを感じませんでした。というよりは、雪の女王がせつぷんして、カイのからだから、さむさをすいってしまったからです。そしてカイのしんぞうは、氷のようになっていました。カイは、たいらな、いく枚かのうすい氷の板を、あっちこっちからはこんできて、いろいろにそれをくみあわせて、なにかつくろうとしていました。まる

でわたしたちが、むずかしい漢字をくみ合わせるようでした。カイも、この上なく手のこんだ、みごとな形をつくりあげました。それは氷のちえあそびでした。カイの目には、これらのものの形はこのうえなくりっぱな、この世の中で一ばんたいせつなもののようにみえました。それはカイの目にささった鏡のかけらのせいでした。カイは、形でひとつのことばをかきあらわそうとおもつて、のこらずの氷の板をならべてみましたが、自分があらわしたいとおもうことば、すなわち、「永遠えいえん」ということばを、どうしてもつくりだすことはできませんでした。でも、女王はいつていました。

「もしおまえに、その形をつくることがわかれば、からだも自由

になるよ。そうしたら、わたしは世界ぜんたいと、あたらしいそりぐつを、いつそくあげよう。」

けれども、カイには、それができませんでした。

「これから、わたしは、あたたかい国を、ざつとひとまわりしてこよう。」と、雪の女王はいました。「ついでにその黒なべをのぞいてくる。」黒なべというのは、*エトナとかヴェスヴィオとか、いろんな名の、火をはく山のことでした。「わたしはすこしばかり、それを白くしてやろう。ぶどうやレモンをおいしくするためにいいそうだから。」

*エトナはイタリア半島の南シシリー島の火山。ヴェスヴィオはおなじくナポリ市の東方にある火山。

こういって、雪の女王は、とんでいってしまいました。そしてカイは、たったひとりぼっちで、なんマイルというひろさのある、氷の大広間のなかで、氷の板を見つめて、じっと考えこんでいました。もう、こちこちになって、おなかのなかの氷が、みしりみしりいうかとおもうほど、じつとうごかずにいました。それを見たら、たれも、カイはこおりついたなり、死んでしまったのだとおもったかもしれせん。

ちょうどそのとき、ゲルダは大きな門を通って、その大広間にはいつてきました。そこには、身をきるような風が、ふきすさんでいましたが、ゲルダが、ゆうべのおいのりをあげると、ねむったように、しずかになつてしまいました。そして、ゲルダは、い

くつも、いくつも、さむい、がらんとしたひろまをぬけて、——
とうとう、カイをみつめました。ゲルダは、カイをおぼえていま
した。で、いきなりカイのくびすじにとびついて、すっかりだき
しめながら、

「カイ、すきなカイ。ああ、あたしとうとう、みつけたわ。」と、
さけびました。

けれども、カイは身ゆるぎもせず、じつとしゃちほこばった
なり、つめたくなっていました。そこで、ゲルダは、あつい涙を
流して泣きました。それはカイのむねの上におちて、しんぞうの
なかにまで、しみこんで行きました。そこにたまった氷をとかし
て、しんぞうの中の、鏡のかけらをなくなしてしまいました。カ

イは、ゲルダをみました。ゲルダはうたいました。

ばらのはな　さきてはちりぬ

おさな子エス　やがてあおがん

すると、カイはわつと泣きだしました。カイが、あまりひどく泣いたものですから、ガラスのとげが、目からぼろりとぬけてでてしまいました。すぐとカイは、ゲルダがわかりました。そして、大よろこびで、こえをあげました。

「やあ、ゲルダちゃん、すきなゲルダちゃん。——いままでどこへいったの、そしてまた、ぼくはどこにいたんだろう。」こう

いって、カイは、そこらをみまわしました。「ここは、ずいぶんさむいんだなあ。なんて大きくて、がらんとしているんだろうなあ。」

こういって、カイは、ゲルダに、ひしととりつきました。ゲルダは、うれしまぎれに、泣いたり、わらったりしました。それがあまりたのしそうなので、氷の板きれまでが、はしやいでおどりました。そして、おどりつかれてたおれてしまいました。そのたおれた形が、ひとりでに、ことばをつづっていました。それは、もしカイに、そのことばがつづれたら、カイは自由になれるし、そしてあたらしいそりぐつと、のこらずの世界をやろうと、雪の女王がいった、そのことばでした。

ゲルダは、カイのほおにせつぷんしました。みるみるそれはほおつと赤くなりました。それからカイの目にもせつぷんしました。すると、それはゲルダの目のように、かがやきだしました。カイの手だの足だのにもせつぷんしました。これで、しっかりしてげんきになりました。もうこうなれば、雪の女王がかえつてきても、かまいません。だって、女王が、それができればゆるしてやるといったことばが、ぴかぴかひかる氷のもんじで、はつきりとそこにかかれていたからです。

さて、そこでふたりは手をとりあつて、その大きなお城からそとへでました。そして、うちのおばあさんの話だの、屋根の上のばらのことなどを、語りあいました。ふたりが行くさきぎきには、

風もふかず、お日さまの光がかがやきだしました。そして、赤い実みのなつた、あの木やぶのあるところにきたとき、そこにもう、となかいがいて、ふたりをまっています。そのとなかいは、もう一びきのわかいとなかいはつれていました。そして、このわかいほうは、ふくれた乳ぶさからふたりのこどもたちに、あたたかいおちちを出してのませてくれて、そのくちの上にせつぷんしました。それから二びきのとなかいは、カイとゲルダをのせて、まずフィンランドの女のところへ行きました。そこでふたりは、あのあついへやで、じゅうぶんからだをあたたためて、うちへかえる道をおしえてもらいました。それからこんどは、ラツプランドの女のところへいきました。その女は、ふたりにあたらしい着物を

つくつてくれたり、そりをそろえてくれたりしました。

となかいと、もう一ぴきのとなかいとは、それなり、ふたりのそりについてはしって、くにざかい国境までおくつてきてくれました。

そこでは、はじめて草の緑がもえだしていました。カイとゲルダとは、ここで、二ひきのとなかいと、ラツブランドの女とにわかれました。

「さようなら。」と、みんなはいいました。そして、はじめて、小鳥がさえずりだしました。森には、緑の草の芽が、いっぱいにふいていました。

その森の中から、うつくしい馬にのった、わかいむすめが、赤いぴかぴかするぼうしをかぶり、くらにピストルを二ちようさし

て、こちらにやってきました。ゲルダはその馬をしっていました。
（それは、ゲルダの金の馬車きんをひっぱった馬であつたからです。）
そして、このむすめは、れいのおいはぎのこむすめでした。この
女の子は、もう、うちにいるのがいやになつて、北の国のほうへ
いつてみたいとおもつていました。そしてもし、北の国が気に入
らなかつたら、どこかほかの国へいつてみたいとおもつていまし
た。このむすめは、すぐにゲルダに気がつきました。ゲルダもま
た、このむすめをみつめました。そして、もういちどあえたこと
を、心からよろこびました。

「おまえさん、ぶらつきやのほうでは、たいしたおやぶんさんだ
よ。」と、そのむすめは、カイにいいました。「おまえさんのた

めに、世界のはてまでもさがしにいつてやるだけのねうちが、いつたい、あつたのかしら。」

けれども、ゲルダは、そのむすめのほおを、かるくさすりながら、王子と王女とは、あののちどうなったかとききました。

「あの人たちは、外国へいつてしまったのさ。」と、おいはぎのこむすめがこたえました。

「それで、からすはどうして。」と、ゲルダはたずねました。

「ああ、からすは死んでしまったよ。」と、むすめがいました。

「それでさ、おかみさんがらすも、やもめになつて、黒い毛糸の喪章もしようを足につけてね、ないてばかりいるつていうけれど、うわ

さだけだろう。さあ、こんどは、あれからどんな旅をしたか、ど

うしてカイちゃんをつかまえたか、話しておくれ。」

そこで、カイとゲルダとは、かわりあって、のこらずの話をしました。

「そこで、よろしく、ちんがらもんがらか、でも、まあうまくいって、よかったわ。」と、むすめはいいました。

そして、ふたりの手をとって、もしふたりのすんでいる町を通ることがあつたら、きつとたずねようと、やくそくしました。それから、むすめは馬をとばして、ひろい世界へでて行きました。でも、カイとゲルダとは、手を取りあって、あるいていきました。いくほど、そこらが春めいてきて、花がさいいて、青葉がしげりました。お寺の鐘かねがきこえて、おなじみの高い塔とうと、大きな町が見



えてきました。それこそ、ふたりがすんでいた町でした。そこでふたりは、おばあさまの家の戸口へいつて、かいだんをあがつて、へやへはいりました。そこではなにもかも、せんとかわつていませんでした。柱どけいが「カツチンカツチン」いつて、針がまわつていました。けれど、その戸口をはいるとき、じぶんたちが、いつかもうおとなになつてゐることに気がつきました。おもての屋根やねのといの上では、ばらの花がさいて、ひらいた窓から、うちのなかをのぞきこんでいました。そしてそこには、こどものいすがおいてありました。カイとゲルダとは、めいめいのいすにこしをかけて、手をにぎりあいました。ふたりはもう、あの雪の女王のお城のさむい、がらんとした、そうごんなけしきを、ただぼん

やりと、おもくるしい夢のようにおもっていました。おばあさまは、神さまの、うららかなお日さまの光をあびながら、「なんじら、もし、おさなごのごとくならずば、天国にいることをえじ。」と、高らかに聖書せいしよの一せつをよんでいました。

カイとゲルダとは、おたがいに、目と目を見あわせました。そして、

ばらのはな さきてはちりぬ

おさな子エスやがてあおがん

というさんび歌のいみが、にわかにはつきりとわかってきました。

こうしてふたりは、からだこそ大きくなっても、やはりこどもで、心だけはこどものままで、そこにこしをかけていました。

ちようど夏でした。あたたかい、みめぐみあふれる夏でした。

青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集 第二巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月15日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

※見出しの字下げは底本通りとしました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年11月22日作成

2014年3月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の女王

SNEDRONNINGEN

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 七つのお話でできているおとぎ物語
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>